

セミと私の一週間

福田 麻友子

セミのフェイントが嫌いだった。

こう、真夏の道路に落ちこちっていて、死んでいると思って近づいたら、急に羽根をバチバチ動かしてくるやつ。

私はその嫌いなセミと、一週間で過ごした。

【7月〇日、月曜日】

一か月は速い。一週間はさらに速い。一日はもう、瞬きしている間に過ぎる。

みーんみんな

ああもう、うるさいな。汗ではり付いた前髪をよけながら、私ってこんなにいつも、心がいちいちやっていたわけ、と思う。子供の頃は、いつだって自分の元気がない理由がわかっていた気がするのに、高校生をしている今は、なんだか退屈を鍋で煮詰めたようなささで覆われていた。生きていく心地がなく、時間が、速く過ぎるくせに長く感じるのだ。

その日もそういう毎日の中の一日だった。

「ぼくは生きているぼくは生きているぼくは生きている……」

夏の暑い昼下がり。公園のセミの声を聞くまでは。

目の前の木の幹にとまっているセミに、私は話しかけた。

「…………ちよつと」

「ぼくは生きているぼくは生きている！ぼくは……」

「そのあなた」

きよとんと、セミがつぶらすぎる瞳で私を見た。いや、表情とかわからないけど。

「ぼくの言葉が聞こえるの？」

可愛らしい少年みたいなの、透明な声が降ってきた。はっきりと人間の言葉に聞こえる。

私がセミ語を話しているのか、それともセミが人間語を話しているのか。前者だったら嫌だなあ。英語もマスターしてないのに嫌なバイリンガルだなあ。

ただ目の前のセミは言葉が通じる不思議はどうでもいらしく、待ちかねたように声で私に笑いかけた。

「嬉しい。ねえ、ぼくとお話しようよ」

私はセミが嫌いなのだ。勿論断った。

【7月×日、火曜日】

いつも通り、心がささくれている。公園を通り抜けようとしたとき、

「ああ君は、あのときの。いい天気だね」

静かな透明な声が降ってきた。木の幹に昨日のセミがいる。

「……………昨日会ったばかりじゃない」

そう言いながら、私はこのセミが昨日のセミなのか自信がなかった。セミの声が昨日より低く、落ち着いていたからだ。

「ねえ、お話しようよ」

「いやよ」

「どうして」

「あんた、セミだもの」

みーんみんな と他のセミの声が響く。発見した。私はこの目の前のセミ以外のセミの言葉はわからない。その目の前のセミが、お願いするように言った。

「昨日より少しだけ多く、ぼくと話してくれるだけでいいんだ」

それが何だというのか。私はそのあと一分だけ、セミの質問に答えた。

【7月△日、水曜日】

気持ちが悪ざわわしている。

「昨日はありがとう。(へいっしゅうかん)を教えてください」

昨日のセミの質問だった。日が昇って沈むまでを何と言うのか、それが七回続くことは、同様に何と言うか。そういう内容だった。どうしてそんなことを訊くんだろうと思った。

「ねえ、今日も、昨日より少しだけ長くお話しようよ」

そう言うセミの声に、動揺した。昨日よりさらに低く、大人の青年みたいな声だった。それでも透明な響きはそのままで、セミは問いかける。

「君は生まれてから、どのくらい生きているの？」

「……十七年」

「ねん？」

私は説明してやった。日が昇って沈むまでを三百六十五回で一年。それを十七回だと。それを聞いたセミは、

「……………すごいね」

吐息みたいな声で、嘔み締めて胸いっぱいにもう一度言った。

「すごい」

何かに感動しているようだった。何がすごいのか全くわからなかった。

【7月□日、木曜日】

なんだか気付いたら、公園に来て四日目になっていた。人間、我に返るときはあるものである。気持ちが悪くもどろろする。私はセミが嫌いだ。

「今日は何のお話をしようか」

セミの声が輝いている。その声はもうおじさんみたいだった。

この三日間、セミのする質問は他愛もなく、当たり前のことばかりだった。尋ねる。

「私と話して楽しいの？」

訊いておいて、楽しくないのは私だ、と思う。それなのにどうして公園に来て、セミと話しているんだろう。セミはだめだ。セミの抜け殻はいいけど、セミはだめだ。

「……………君と話していて、とっても楽しいよ」

目の前のセミはどこか遠い目つきで私を見た、気がした。人間より綺麗な言葉でしゃべる奴である。

それでもセミはセミだ、と思い直し、帰ろうとしたところをセミに止められる。

「もう少しだけ。昨日より。お願い」

頭がぐわんとした。そこから動けなかった。

【7月○×日、金曜日】

セミについて詳しくは知らなかった。虫全般が嫌いなので、本に写真とかが出てくるのが嫌だったからだ。だけど今日は、インターネットでセミの生態を検索してみる。うわ、羽

化の動画が貼り付けてある。やめて鳥肌が。

抜け殻の写真もあった。小さい頃集めたなあ、と幼かった自分の夏休みを回想する。羽化の動画を避けながら、文章を読み始めた。

土の中で二、三年過ごすらしい。すごいなあいつ。成虫になってからの寿命は一週間だと記してあった。

「……………一週間」

思わず声が漏れる。

私があいつと初めて会ったのは、月曜日だった。もしその前から成虫になっていたとしたら、もしかして今日死んでるんじゃないか……とそこまで考えて、パソコンの電源を乱暴に落とす。布団にもぐった。

今日は絶対に公園に行かない、と瞬間的に決めた。

無理やり布団にくるまって、久しぶりに夢を見る。セミが訊いてきた他愛もない質問が、突然意味があるように思えてきてならなかった。真っ黒な瞳が、私を見つめて悲しそうに歪んだ。表情なんかあるはずなのに。そして延々とあの声で繰り返すのだった。

「ぼくは生きている」

【7月△□日、土曜日】

うだるような暑さだった。ぼくぼくしていた。ちらっと通り過ぎよう。土の上に落ちていたって見て見ぬふりをしようと思った。公園を通り抜ける。いつもの木が近づく。

みーんみーんみんな……

横目で木の幹を見る。セミはとまっていなかった。立ち止まってしまう。

「……………来てくれないかと思ったよ」

向かいの木からの透明な声。昨日一日会わなかっただけで、その声はしわがれた老人の声になっていた。喉が熱くなって振り返り、私はセミと視線を合わせる。

「いつもの木にいなさいよ、まぎらわしい」

つぶらな瞳の光が少し動く。

「ぼくとお話しようよ」

私は木の近くのベンチに腰を下ろした。いつもより長く話してやるか、という気分だった。

それでも夢に出てきたことを思い出して、まず文句を言った。

「私、セミ嫌いな」

「知ってる」

「だって、見た目が気持ち悪いんだもの」

「…………ごめん」

「特に、死んだと思っただけで死んでないの、あれ最悪」

でもあれは驚かそうとしているわけじゃない、とセミは主張した。足掻いているわけでもなく、生理現象のように、最後に羽根を動かすのだそう。私は顔をしかめた。

「それでも、あんたが地面に落っこちたって、私は近づいたりしないからね」

そう釘をさすと、セミは笑った。ふと私は思い出して、

「そういえば初めて会ったとき、あんた何言っただの」

「なになに？」

「ぼくは生きてるとか、変なことずっと連呼してたでしょ」

木の幹から、ああ、というように、

「君がいつも聞いている、僕たちセミの声だよ」

夏のセミの鳴き声はみんなそう言っているのだと、セミは私に話した。だからこうして私と話しているセミは、人間の耳からしたら、変な鳴き声をあげているのかもしれない。

「……昔、この公園でセミの抜け殻を集めたことがあったなあ」

そう私が漏らすと、セミが予想外に面白がって、追求してきた。友達に服にいたずらでつけた話をする、

「セミ嫌いなのに、ぼくたちの抜け殻で遊ぶんだ？」

「セミの抜け殻は嫌いじゃないから」

そうして話しているうちに、気がつく、空が赤くなっていた。

【7月◎日、日曜日】

風いだ海みたいな気持ちの夕方。

「今日も暑いね」

おじいちゃんみたいな声でセミが言った。お願いされなくても、私はベンチで耳を傾けていた。

「ずいぶん昔だけど、初めて君と話したとき、嬉しかったなあ」

私にとってはたった六日前だ。だけどセミの言う通りずいぶん昔な気がして、何も言えない。

「ぼくね、土の中ですごく長く眠っていたんだよ」

「セミは幼虫のとき二、三年土の中にいるって書いてあった」

私の言葉にびっくりしたように、セミはくるくると目を回した。そっかあ、と呟いて、

「ぼくも、君の言う〈ねん〉を過ごしていたんだね」

遠く懐かしそうな声を出す。そうして私に小さく「ありがとう」と言った。

「……なにが」

わかっているくせに訊いた。セミの声は透明でしわがれている。

「君にとっては少しかもしれないけれど、ぼくにとっては、生きていた大半を君と過ごしたから。暗い土の中より、ずっと良かったんだ」

「……まだ一週間でしょ」

「もう、一週間だよ」

その声が優しすぎて、目元が熱くなる。私がいつも、流されるように過ごしている一週間、こいつはもう大人になって、老いたのだと悟った。

セミの声はいつもよりずっと穏やかで、落ち着いている。

「ぼくが動かなくなっても、お墓作ったりしないよね」

「……なんで」

「ぼくは、セミだから」

当たり前だった。今までセミの死骸を見て、墓どころか、何の感情もなかった。私が黙っている、セミが訊いてくる。

「君はあとどのくらい生きるの？」

そんなのわからない。ある日突然、事故とかで死ぬかもしれない。でも無事に寿命を全うするなら、あと六十年ぐらいは生きられるはずだ。そう言った私の言葉を聞くと、セミは嬉しそうだった。

「それじゃあ、ぼくから見たら、君はまだ土の中だよ」

「なにそれ。幼虫ってわけ？」

「うん」と本当に嬉しそうに笑う。まるで私の未来を、祝福するような優しい声だった。私たちの周りでセミがたくさん鳴いている。こいつ以外のセミの声は、今の私には聞こえない。

「君が、この先ずっと生きていけるなら、こんなに嬉しいことってないな」

「……………」

「ぼくの一生を、ずっと一緒にいてくれてありがとう」

ずっと一緒になんていてあげなかったじゃないか、と思う。たった七日だ。私が今まで生きてきた月日のほんの一握りの、さらに一握り。

「私ね」

「なに？」

「あんた、セミだけど」

私のとるにたりない時間、こいつの一生。

私たちの一週間。

「……あんたのこと、嫌いじゃなかったわ」

えへへ、とセミが照れたように笑った。そして、出会ったときの、透明な少年の声になって呟いた。

「……………しあわせだなあ」

それきり、セミは何も言ってこなかった。私はベンチに座って前を向いたまま、後ろの木から、何か軽いものが落ちる音を聞いた。そして、小さな羽根の音がばちばちとした。

その音も聞こえなくなって、立ち上がる。振り向くことはせずに、公園を歩きだす。

歩きながら、この一週間だけが、切り取られたように夕方に浮かび上がる。

心を覆っていた暗いだるさや、毎日の気味の悪い軽さが、まるであのセミが全部持っていたように、私の中から消えていた。

みーんみーんみんなみんな

セミがたくさん鳴いていた。

私も生きているんだな、と涙が出るぐらい思った。

明日は月曜日だ。また明日から、一週間が始まる。